第62回　オオヒョウタンゴミムシ

ゴミムシの仲間は種類が多く、しかもよく似ていて見分けがつきにくいものも多いため、種の同定をするときにいつも苦労します。しかし、オオヒョウタンゴミムシはその大きさと特徴的な姿から、すぐに見分けがつきます。体色は多くのゴミムシと同様に単純な黒色ですが、ヒョウタンゴミムシの仲間の全般的な特徴である前胸と胴体の間にくびれがあるのと、かなり立派な鋭い大顎を持っているので、区別は容易です。また、ちょっと見た目はクワガタに似ています。他のヒョウタンゴミムシの仲間よりひときわ大きく、体長が50㎜を超えるものもいます。

ゴミムシはごみ溜にいる虫という意味ですが、オオヒョウタンゴミムシは海岸の砂浜や河原に生息しています。砂地に穴を掘りそこを住みかとしています。生息地に行くと、独特の足跡が見つかるということですが、実際に探してみると、風紋などいろいろな模様があるので、見分けるのは簡単ではありません。夜行性で夜間調査により見つけやすいとのことです。私は、たまたま捕まえたことは何度かありますが、オオヒョウタンゴミムシを狙って足跡調査や夜間調査をしたときには、何者かに食われたと思われる死体の破片を見つけただけで、生きている個体を見つけることはできませんでした。やはり、それほど数は多くないのではないかと思います。

河北潟周辺では、内灘砂丘には一定数が生息しているようです。すずめ野菜をつくっているかほく市の畑でも何度か見かけました。普段から砂丘地で野菜栽培をしているせいか、普通にいる昆虫のイメージがありましたが、石川県では絶滅危惧Ⅱ類、環境省のレッドリストでも準絶滅危惧に選定されています。石川県レッドデータブックによると、沿岸部の土地開発、海水浴場の大型重機による整備、道路建設等で生息環境が悪化しているとのことです。河北潟周辺でも、最近までのと里山海道の拡張整備や、現在、大根布放水路の水門の改修工事などが行われていることから、本種の生息状況に影響がないか気になるところです。

石川県では、海浜性の昆虫では、本種の他、イカリモンハンミョウやハラビロハンミョウ、カワラハンミョウなどが絶滅のおそれのある種として取り上げられています。海浜は護岸工事などで人の手が入りやすい場所でもあり、こうした種への注目をもっと広めていくことが必要です。河北潟湖沼研究所では、今年から海岸のごみの調査やごみ拾い活動を始めました。以前より海岸を利用するシギ、チドリなどの渡り鳥や、水生無脊椎動物などを調べていますが、今後は内灘砂丘と内灘～高松海岸の海浜性の昆虫についても注目していきたいと思います。（文　高橋 久）